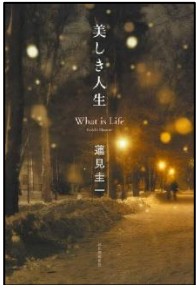


Book Preview

富山高校図書館 2025.1



『 美しき人生 』

蓮見 圭一【著】

両親を知らずして北海道岩内町で育った真壁純は14歳のときに、転校してきた美しく聡明な明子に恋をする。クリスマス・イブの吹雪く日、初めて二人はデートをするが、純はその後静岡へと転校することが決まっていた。それから6年、ようやく二人は再会したが、明子は変わり果てた姿になっていた。切ない恋とほろ苦い青春、そしてその後の人生の奇跡を見事に描いた、渾身の書き下ろし感動長編！

『 幸田家のことば 』

青木 奈緒【著】

だれにでも、日々の暮らしに根づいたことばがあります。それは、それぞれの家族の生き方や暮らし方をあらわし、知らず知らず自分のよりどころにしていることばです。曾祖父・幸田露伴、祖母・幸田文、母・青木玉から筆者まで四代をつなぐ幸田家のことばには、意気があり、ユーモアがあり、折り合いをつけながらも潔く生きるための力があります。幸田家のことば40語に込められた生きる道理をひもとく本書は、家族とともにあることばが自分にとって大切な財産と気づかされる心に響く一冊です。



『 ラウリ・クースクを探して 』

宮内 悠介【著】

ソ連時代のバルト三国・エストニアに生まれたラウリ・クースク。黎明期のコンピュータ・プログラミングで稀有な才能をみせたラウリは、魂の親友と呼べるロシア人のイヴァンと出会う。だがソ連は崩壊しエストニアは独立、ラウリたちは時代の波に翻弄されていく。彼はいまだどこで、どう生きているのか？—ラウリの足取りを追う“わたし”の視点で綴られる、人生のかけがえのなさを描き出す物語。

『 鳥と港 』

佐原 ひかり【著】

大学院を卒業後、新卒で入社した会社を春指みなどは九ヶ月で辞めた。所属していた総務二課は、社員の意識向上と企業風土の改善を標榜していたが、朝礼で発表された社員の「気づき」を文字に起こし、社員の意識調査のアンケートを「正の字」で集計するという日々の仕事は、不要で無意味に感じられた。部署の飲み会、上司への気遣い、上辺だけの人間関係—あらゆることに限界が来たとき、職場のトイレから出られなくなったのだ。退職からひと月経っても次の仕事を探せない中、みなどは立ち寄った公園の草むらに埋もれた郵便箱を見つける。中には、手紙が一通入っていた。「この手紙を手にとった人へ」—その手紙に返事を書いたことがきっかけで、みなどと高校2年生の森本飛鳥の「郵便箱」を介した文通が始まった。無職のみなとと不登校の飛鳥。それぞれの事情を話しながら「文通」を「仕事」にすることを考えついたふたりは、クラウドファンディングに挑戦する。



『 一番の恋人 』

君嶋 彼方【著】

道沢一番という名前は「何事にも一番になれるように」と父が付けた。父の期待に応えることで一番の人生はうまくいったのだが、恋人の千風にプロポーズしたとき、「好きだけど、愛したことは一度もない」との返事に一番はショックを受ける。千風はアロマンティック・アセクシャル（恋愛感情も性的欲求も抱くことがない性質）で、ずっと「普通」になろうともがいてきたのだった。思いを断ち切れない一番と普通になりたい千風は、そのまま結婚することを選ぶのだが—。